

# 実施の効果

## 1. 子どもの変化

### 1) 松原第七中校区

#### 効果検証の方法

私たちが人間関係学科の実施において大切にしてきたことは、子どもたちの「気づき」と「ふりかえり」であり、その「わかちあい」を通じ子どもたちの成長を確認してきた。毎回の人間関係学科の授業後に子どもたちが書いた「ふりかえりシート」から、子どもたちの「気づき」をひろいあげ、「わかちあい」として子どもたちの中に共有化してきた。また、授業そのものに対しての子どもたちの評価をデータ集積し、授業の内容づくりや子どもたちの状況分析に活用している。

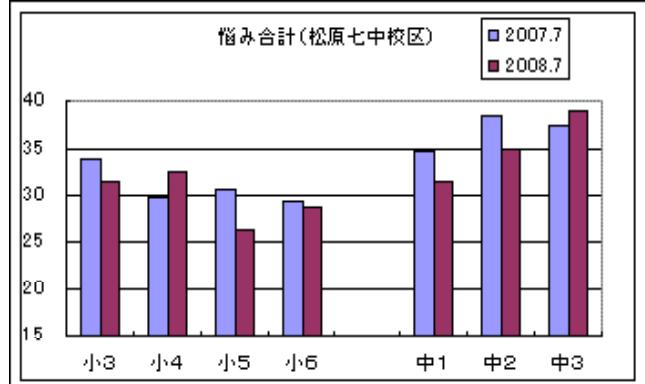
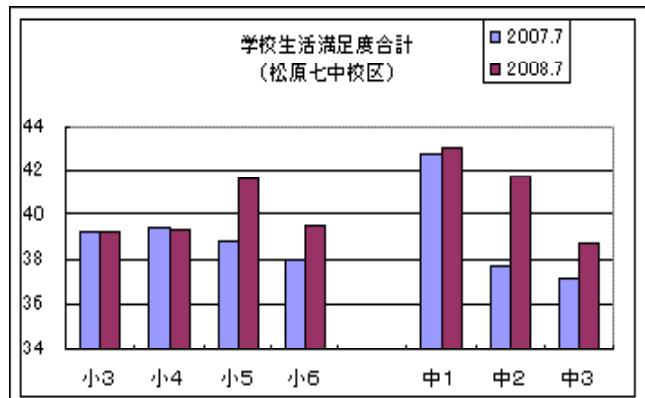
また、各学期末には学校生活調査・学校生活アンケートを実施し、子どもたちの状況や学校生活にどのような変化があらわれているかを確認している。

本年度、各校の効果検証の取組は基礎データづくりに重点を置いてきた。蓄積している基礎データは、[1]「あてはまる」「あてはまらない」の率の推移、[2]得点推移の2種類である。この2種類のグラフをベースにしながら、統計ソフトなどを活用し、子どもたちの変化を追っていった。

今回の効果の検証においては、学校生活調査・学校生活アンケート、学校教育自己診断などの調査結果をもとに、子どもたちの変化から効果を検証するとともに、子どもたちの集団という意味でのそれぞれの学年という観点で見た効果を検証していきたい。

#### 小中のギャップ

右上の2つのグラフは、学校生活調査の2007年7月調査と2008年7月調査において、小学校の数値を換算(4件法 5件法)した数値と中学校の数値を並べたものである。松原七中の事例を見てみても、小学校から中学校へ上がった段階で、すぐに不適応を起こし不登校に陥ってしまう子、夏休みを過ぎて、勉強や人間関係のストレスで不登校に陥ってしまう子、など、小中の段差(急激な変化)により中学校1年生で不登校に突入してしまう子が多い。2年分のデータだけなので早計かもしれないが、この2つのグラフから不登校に突入していく契機を読み取ることができる。まず、学校生活満足度から言えることは、小学校から中学校に上がった段階で急上昇しているという点である。まず、複数の小学校から入学し



てくるということ、学級担任制から教科担任制への移行、「勉強」重視の学習スタイル、クラブ活動から部活動へなど、子どもたちの世界は一気に広がり、満足度や期待感は高まっていく。しかし、少数ではあるが、その一気上昇に乗り切れずに、人間関係づくりの苦手な子どもは、不登校に陥ってしまう可能性が高いということである。そして、中学校に入ると同時に、はっきりとした段差を伴って上昇していく悩みの数々が集団全体に追い打ちをかける。何もしなければ、不登校生を次々と生み出す条件は中学校にはあると言える。200

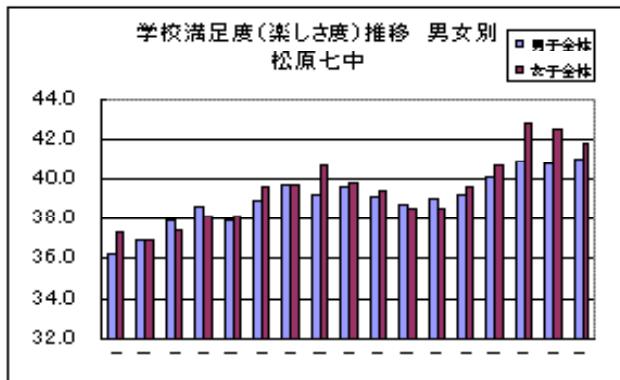


8年秋、そんな小中の段差を埋めるべく、人間関係学科における小学校と中学校のコラボレーション授業に取り組んだ。中学生が小学生を歓迎するという形で「小学生歓迎スター」を見ること・伝えること・聞くこと・訊くことを織り交ぜた「コピーゲーム」を実施した。人間関係学科の授業を通じてピア・サポート的な学びと気づきが得られ、小学生の子どもたちの中学校への不安を沈め、先輩に対する信頼を深めた画期的な授業だったと言える。

## 2 ) 松原第七中学校

### 学校生活調査より

#### a ) いじめに関連する項目から見えること

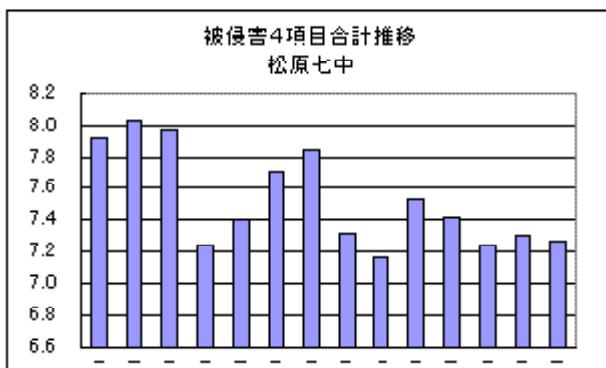


2003年度から2008年度まで、2006年度の若干の落ち込みはあったものの、満足度合計（合計50点）は年々増え続け、調査開始から昨年3月までの間、およそ5ポイント以上の上昇を見せている。男女別に分けて見ていっても、昨年3月調査が男女ともこれまでの最高値となっており、上昇傾向にあると言える。

その上昇理由の原因は、いくつか考えられる。その中でも、「まわりからの行為」ということでピア・プレッシャーの観点から考えていくことにする。

そこで、学校生活調査の中の、

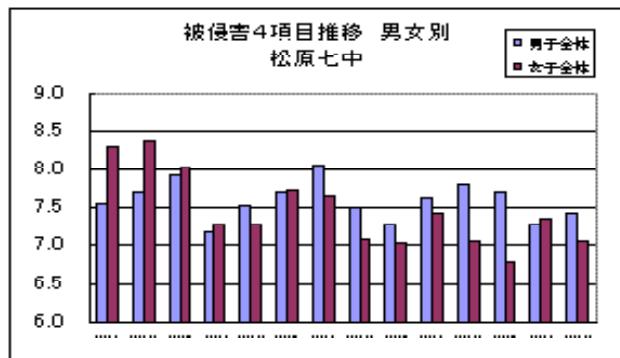
- b4 無視される
- b5 いやなことを言われる（される）
- b6 仲間はずれにされる
- e17 人からの陰口、うわさ話をされること



の4つの項目を拾い出し、合計点（合計21点）を被侵害得点として、2004年度からの経緯を見ると、本年度まで徐々に減少していることがわかった。生徒指導部会や学年会議の中での事例検討を通じても、近年では、子どもたちの中で突発的・単発的な事例は発生しているが、継続的・深

刻的な事例には至らずにすんでいる。学校生活調査やふりかえりシートなどのアンケートにより、子どもの変化をいち早くキャッチし、それを教員間の共通認識にまで高め、いじめをする側・される側の双方に、複数の支援を様々な角度から迅速に行ってきた。その結果が、現在の松原七中の現状をつくり出していると言える。また、いじめに関わらず、子どもたちのトラブルや悩みに常にアンテナを張り、必要に応じて適切な支援を供給し、子どもたちとの相談活動を展開している。それに加え、それぞれのアンケート調査によって、子どもたちと教員とがつながり、様々な問題の抑止力となっているとも言える。そんな人間関係学科を真ん中に据えた学校づくりの成果として、これら4項目における変化があるのではないだろうか。

これを男女別のデータに分けてみると、男女別の変化に大きな違いがあることがわかった。2005年を境にして、男子と女子の数値が接近・逆転しているということである。女子は2004年度から、およそ順調に2ポイント減少しているのに対し、男子の変化は最大0.7ポイントの間で上下しているということである。満足度は男女ともほぼ同じような上昇の推移を見せているにもかかわらず、まわりから「侵害される」という観点での得点では、女子には大きな変化があるにも関

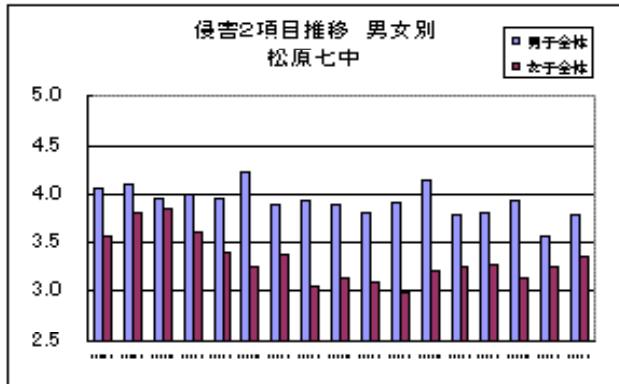


わらず、男子には目立った変化がないということである。

さらに、「侵害する」という観点で推移を調べていくと、学校生活調査のストレス対処の項目の中にある

d6 人が嫌がることを言う d7 人をたたく

という項目を合計（合計10点）して、侵害得点と位置づけてみた。するとこれも、女子の減少・横ばいの状況に対して、男子は減少傾向が見られるものの、ほぼ横ばい状態であることがわかる。しかも、数値的には常に男子が女子を上回っている。



「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人をたたく」という行為は、「関係性の行為」である。じゃれあう事を通じて人間関係をつくっていく男子特有の手法とも言えるし、試し行為などとしても望ましい表現を取ることができない子どもたちの未熟な表現方法として、男子の中に根強く存在しているのかもしれない。

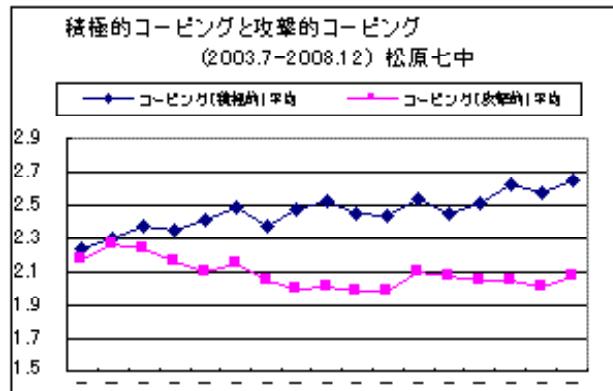
一方女子においての課題は、女子がつくりがちな閉鎖的小グループに対してどれだけ風穴を開け、風通しのよい集団にしていくか、ということがあげられる。松原七中の人間関係学科の主要なターゲットスキルは「自己信頼」「コミュニケーション力」「対人関係」である。年度や学期の節々には、自己開示のプログラムを実施している。その積み重ねが女子の小グループ集団どうしに風穴を開けているのであろう。

いじめの未然防止に関わる有効なスキルは、自己認識を広げ共感性を高めることであると言われている。いじめ問題の解決にあたって常に課題となることが「人の気持ちがわかる」ということである。共感性〔=人の気持ちを想像できる（WH O ライフスキルの解説より）〕をさらに育てていくことが、いじめ未然防止の鍵になるのであろう。

松原七中では、昨年度から10月の教育相談（二者懇談）に向けて「ほっとアンケート」という、子どもの生活度、効力感、承認度などをはかるアンケートを実施している。学校生活調査の被侵害得点とも兼ねあわせて、いじめ未然防止に関わって、子どもたちと教師がつながる手段として活用している。日常の相談活動とあいまって、子どもたちと教師のつながりが強まっていくことで、子どもたちの中におけるいじめに対して、大きな抑止力となっていることは間違いない。さらに、子どもたちは、一つひとつの人間関係を構築していく作業に人間関係学科を通じて取り組み、自立する力と人間関係を調整する力を育てていく。そのプロセスを通じて内発的なエネルギー（エンパワーされた力）を生み出し、子どもたちの集団内部

で、いじめに関わるような事象を排除し、集団を浄化させていく力をつけていくのである。まさに、人間関係学科は、生徒指導の観点で開発的予防的な「ガイダンスカリキュラム」（授業としての生徒指導）として機能していると言える。

### a) ストレス反応とコーピング（対処）



松原七中においては、1年生の2学期に、ストレスマネジメント学習を展開し、その後、アサーティブな表現や主張、感情対処、リフレーミングなどの学習へつなげている。その結果、ストレス反応合計は減少傾向にあり、積極的コーピング（「d1 スポーツで発散する」「d2 友だちに相談する」「d3 家族に相談する」「d4 先生に相談する」の平均）と攻撃的コーピング（「d5 モノにあたる」「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人を叩く」の平均）の差が広がっている傾向にある。2008年12月の最新調査では、その差が0.572とこれまでの最高値となっている。



さらに、積極的コーピングがいかに、システムティックに育成されているかをあらわしているのが、このグラフである。\*印をつけた調査は、全て3月調査である。一つの年度には、学期末での調査なので7月調査、12月調査、3月調査の3回の調査があるわけだが、年度の最終調査である3月調査が、全てその年度の最高値を出していることに注目したい。3年生が卒業し、新たな1年生を迎える。そして、新2年、新3年ともにクラ

ス替えがあり、新たな人間関係づくりが始まる。従って、積極的コーピングの数値は7月調査で一旦下がるのであるが、また3月調査に向けて上昇していく。途中、教員の大量異動があったにも関わらず、3月調査の数値が上昇し続けているということに、生徒・教員ともに「伝統」としてのレベルで受け継がれ、引き継いできた結果であることが見いだせる。

### c) ボランティア活動との関連性

「研究開発の内容」の項で述べたように、本年度から子どもたちの社会的有用感を高めていくために、生徒会がボランティアの取組を用意し、子どもたちに参加を訴えた。ボランティアへの参加を「生徒会がんばり手帳」にスタンプを押すというやり方で、本人もまわりも確認できるようにしている。(もちろん「手帳があるからボランティアに参加するんじゃありません。」とちゃんと原則論を言える子どももいるが)これをデータ化し、学校生活調査の様々な項目(2008年7月調査)との相関を見た。すると、ボランティアに参加している子どもについて次の相関が示された。

(Pearsonの相関係数で5%又は1%水準で有意〔両側〕)

#### 学校生活満足度との関連

- a 学校生活満足度合計 [ + ]
- a2 楽しみな授業がある [ + ]
- a3 よくわかる授業がある [ + ]
- a8 楽しくておもしろい先生がいる [ + ]

#### いじめとの関連

- d ストレス対処(攻撃的) [ - ]
- d7 人を叩く [ - ]

#### 不登校との関連

- c1 とれも疲れている [ - ]
- d10 学校を休む [ - ]

#### 自己肯定感との関連

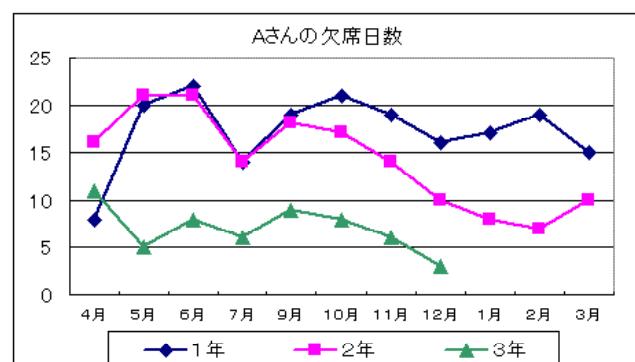
- f4 私は、あまり悩まずに決心することができます [ - ]

以上9項目である。データの蓄積不足や相関係数の低さが気になるところであるが、大いに参考になるところである。学校生活満足度との関連では、教員との関係性が+である。子どもどうしの関連性との相関が出なかったという結果には少々驚きを感じた。いじめ・不登校との関連で、「攻撃的コーピング」と「d10 学校を休む」という項目に関連性が見られたことは、ボランティア活動といじめ・不登校が無関係で無いことを表している。ボランティア活動がいじめ・不登校の未然防

止につながるという仮説設定が証明される可能性が出てきたということである。今後、ボランティアの参加機会を更に設け、子どもたちの変化を追っていきたい。さらに、興味が持てるのは自己肯定感との関連である。「f4 私はあまり悩まずに決心することができます」と-の相関があるということである。要するにボランティア活動というものが、「決断できない事が悩ましい子どもたち」にとって、ボランティアに参加をする決断もって、自己有用感を得る機会になっているのではないだろうか。ボランティアはそんな子どもたちが結構気軽に越えることができるハードルなのかもしれない。

### 不登校からの復帰(ほっとスペースの活用)

Aさんについて



具体的な事例は非掲載にしております

## 25期生（現1年生）について

毎年、入学前の3月に学校生活アンケートを実施しているが、その中のそれぞれの項目（学校生活満足度・悩み・ストレス反応・自己肯定感）の相関関係を分析した。それが、次の表である。

Pearsonの相関係数

	学校生活満足度	悩み	ストレス反応	自己肯定感
学校生活満足度		-.627(**)	-.350(**)	.473(**)
悩み			.659(**)	-.654(**)
ストレス反応				-.623(**)
自己肯定感				

（\*\* 相関係数は1%水準で有意（両側）です。）

どの関係も強い相関関係にあり、子どもたちが「学校生活を楽しい」と感じることの有用性を読み取ることができる。そこで、1年生当初のHRSでの取り組みにおいては、「楽しめる時間になること」を第一に心がけ、ワークの実施を行った。

### a) ふりかえりシートより

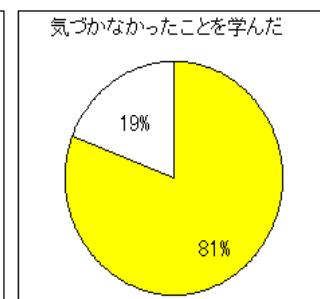
- 「サイコロトーキング」で、自分のことを班の人に分かってもらえてうれしかった。
- 「流れ星」でやったように、考えて行動することは、自分の生活に深く関わっていた。
- 「何でもキャッチ」で、相手に気持ちを伝えるのはとても大切だとわかった。
- 「こんなときどうする？」で、自分の思った事をすぐに言わず、考えてから言おうと思った。
- 「アニメの村」で、みんなで協力してでき、協力って大切だな～と思った。
- 「新聞大作戦」で、班で協力して探したりするのがめっちゃ楽しかった。
- 「コピーゲーム」の時のように、相手にうまく伝えられたら、何をやってもうまくいく。
- 「ロールプレイ」で、どんな軽い気持ちで言った言葉でも、言われた人にとっては感じ方が違っていて、悲しくなるときがあることがわかったので、ちゃんと言葉を考えて話したい。
- ストレスの学習で、ストレスの原因はたくさんあって、身近なところにあるとわかった

から、ストレスの発散の仕方を自分でちゃんと考えなきゃいけないと思った。

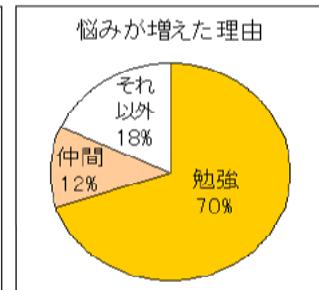
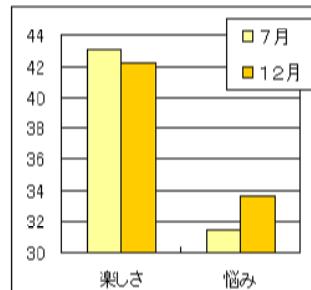
- アサーションは、お互いにいい気持ちになれるから、よいと思った。これから使ってみたい。
- 小中コラボをやってみて、これから後輩ができるて、困っていたら、教えてあげようと思った。みんなをまとめられる先輩になりたい。お互いにイヤになる関係をつくらない。

### b) HRS自己評価（2学期末）より

HRSの時間が、楽しみながら、内容を理解し、気づかなかつたことを学ぶ時間となっていることがわかる。今年度の1年生は、小学校の頃から『あいあいタイム』に取り組んできた初めての学年である。



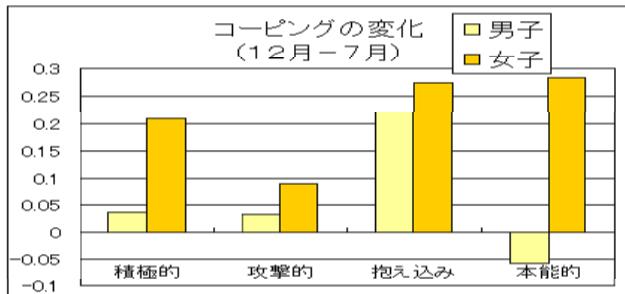
### c) 学校生活調査より



7月と12月を比べると、「満足度」は下がり、「悩み」が増えている結果となった。これは、例年の1年生と同じ結果であるが、悩みが増えた理由を調べると、「勉強・成績が上がりない」という理由が70%を占めていることがわかった。中学校での勉強内容が難しくなり、そのことが一番の悩みとなっているようである。

2学期には、ストレスマネジメント学習に取り

組んだ。ストレスへの対処法(コーピング)をたくさん学ぶ中で、女子には、特にコーピングの変化が見られた。ただ、現時点では、「d1 スポーツで発散」、「d8 がまんする」、「d12 寝る」、「d13 食べる」など“いろいろな方法を知り、あらゆる方法を試した”段階であった。「相談する」などの項目は、まだまだ低かった。今後の課題として、継続的に取り組んでいきたい。



#### 24期生(現2年生)について

##### a) ふり返りシートより

###### - 職場体験学習と連携したワーク -

###### ~「選ぶ」ってどういうこと?

###### 気球に乗って世界旅行~

- ・何が大事か考えながら捨てていったら最終的に自分にとって一番大切なものが残った。
- ・自分にとって必要ないって思ったものを捨てたけど人と全然違っていて、人それぞれなんだと思った。

###### ~パニック体験! イライラ棒~

- ・すっごく焦ってどきどきして、普段出来ることもできなくなることがわかった。
- ・「あと、何秒」とかプレッシャーをかけられると焦る。落ち着いたらできると思う。

###### ~きくスキルを高めよう! 声だけテレビ~

- ・「絶対わからへんわ!」って思っていたけど、真剣に聞いたら意外に分かるんだなって思った。

- ・おもしろかった。班の子がカスタネットたいている時しっかりきいて聞かないとアカンと思って集中して聞いたから、普通にしゃべっているときもよく聞かないとだめだな~と思った。

###### ~ジェスチャーゲーム

###### 言葉を使わないコミュニケーション~

- ・言葉を使わないで顔の表情とか体だけで伝えることができるということがわかった。

###### ~自分の感情をコンロロールしよう

###### 3・2・1アクション!~

- ・ロールプレイがおもしろかった!今まで自分がしていたのは、もっとむかつく方法や人に迷惑かける方法だったからそこを考えないといけない

いと思った。

・「大丈夫」って言い聞かせているときがあった。これって落ち着こうとしてたいい方法だったんや~って思った。

##### ~アサーショントレーニング~

- ・アサーションの方法を上手く使えたら、友だちや仲間関係、社会でも役に立つと思った。

##### - スキー合宿と連携したワーク -

##### ~トラストアップ&ウォーキ~

- ・人を信頼して自分を全部任せるのは意外と不安なことなんだと思った。でも信頼されるとすごく嬉しかった。

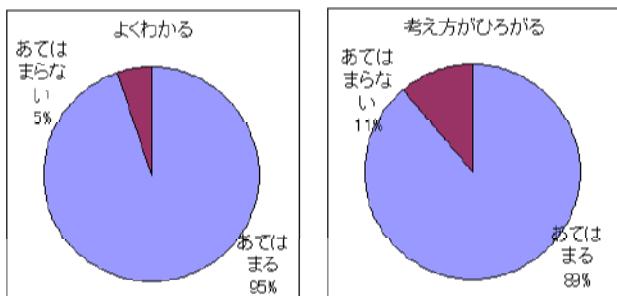
##### ~「それは私です」~

- ・クラスの子の紹介なのに、なかなか分からぬ時があった。意外とまだまだ知らないことがあるんだなと思った。

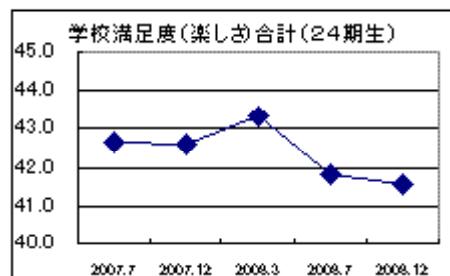
- ・今日のHRSはすごくおもしろかった。クラスの仲間の事を知るのは楽しい!

##### b) HRS自己評価より

HRS自己評価からみると、2年生の約90%の子どもたちが「HRSはよくわかる」「HRSによって考え方を広げることができた」と感じている。



##### c) 学校生活調査などから見えてくる変化

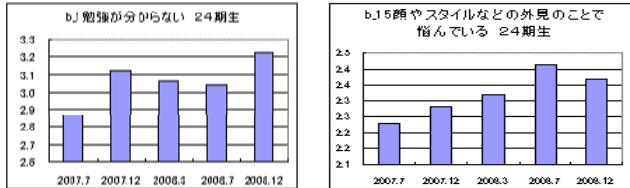


24期生の2年生は入学当初より、元気で明るく、幼さの残る子どもたちで

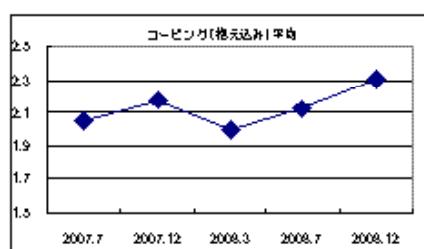


あったが、2学期に入り、いろいろな面で変化が出てきた。まず、学校生活調査の「a1学校が楽しい」という項目に2学期になって、減少をしてい

る。原因として考えられるストレスや悩みに関する項目を見てみると、どれも目立って増加していない。しかし、悩みの項目別に見てみると、「友だち」との関係についての項目での悩みは減少しているが、「勉強」や、「外見」に関する悩みが

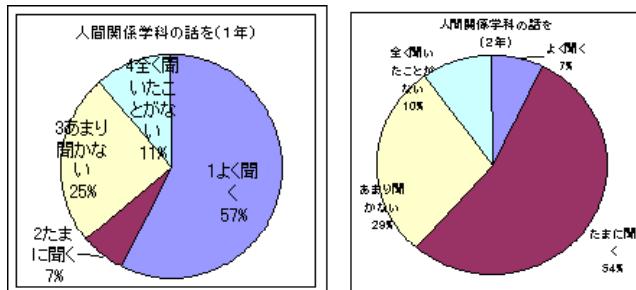


増加していることがわかった。これらのストレスや悩みを現2年生はどうのように対処しているか、ストレスのコーピング方法を見てみると、「抱え込み」タイプの対処法をとる子どもたちが増えて



などがあるが、中でも「d9一人でじっと考える」の項目が増加していた。

保護者に対するアンケートでも、「人間関係学科の話を聞くか」と言う質問の1年生と2年生での結果で、よく聞くという項目とたまに聞くの項目の得点が逆転した。思春期に入り、自分自身で



じっくりといろいろなことを考えるようになったのではないかと感じている。今後は、自分の思いを仲間に伝えたり、スキー合宿でのクラスミーティングを通して、自分の思いや考えを伝えていく取組をしていきたい。

## 23期生(現3年生)について

23期生は、学年が68名(2クラス)と、小さな集団である。小学校も、恵我南小学校で1クラス、恵我小学校で2クラス(半分は松原市立松原第四中学校へ進学)。さらに、男女比が男子40名、女子28名、つまり1クラス20名の男子と14名の女子、という非常にアンバランスな構成である。23期生は、就学時から小集団で過ご

し、クラス替えによる組み直しが少なかったため、自己表現や人間関係の再構築に難しさがあったと言える。が、心身の成熟と共に、少しづつ変化をみせている。

### a) ふりかえりシートより

~何にでも意味がある!「名画鑑賞」~

・1つの視点から見るんじゃなくて色々な視点から見ようと思った。

・いやなことがあったときも、視点を変えてみたい。ポジティブでいいなと思った。

~仲間と協力!「トラスト・アクション」~

・相手を信じてな、でけへんなあーと思った。でも、女子全員でトラストアップやって、失敗ぎみやったけど楽しかった。

・あまりしゃべったことがない子といっしょにやってよかったです。

~修学旅行で・・「こんな時、どうする?」~

・みんなのロールプレイがおもしろかったです!

・礼儀正しくしたほうがトラブルが起こりにくいし、礼儀正しい方が気持ちいい。

~あなたと私を分ける「線」~

・自分もちゃんとした境界をつくるなと思った。

・今まで、自分が嫌だと思っても、口に出すことができなかったりした。それを伝えることも大事と分かった。逆に、自分が許せるものでも他の人からしたら嫌に感じることもある。気をつけないといけない。

~職業調査にむけて!「アポの取り方」~

・言葉づかいに気をつけないとあかんと思った。言う内容をちゃんとまとめておこうと思った。

・敬語を使って、自分が何の目的で行くのかをしつかり言えるように頑張りたい。

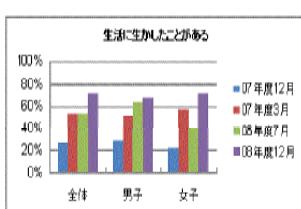
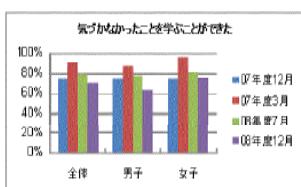
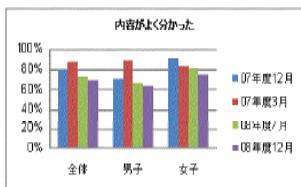
~先輩からの聞き取り~

・入って本間に一生懸命頑張ったら変われるんだと分かった。1,2年の時どれだけ悪い点とか、授業集中とかできていなくて、自分で変わろう!って思ってそれを実際に行動に移せば、ピックリするぐらい入って変わるんだなって思った。私は、頭の中では勉強せなあかん!とか思ってはいるけど、なかなかそれを行動に移せない。あせってるだけで、いつも勉強しないで終わってる。だから、もうそろそろしないとまじでヤバイからちょっとずつやけど本間に行動に移そうと思う。今まで、しんどいからまた明日みたいな感じでさぼってたこととか、最初はちょっとずつやけど最終的にはいっぱいできるようにならいいなと思った。

### ~ ロールプレイで面接練習 ~

- ・態度・言葉遣いに気をつけなあかんと思った。
- ・椅子に座る前に、印象が決まってしまっていた。
- ~ テストにだってスキルが必要 ~
- ・自分もテストの時、寝ます。けど、それがあかんことに気づいた
- ・みんながバーって書いてたら焦る。焦ったらわからんくなる。
- ・入試でうまくいくようにテストでなれることと、高校に体験に行ったり先輩にきいたら良いことが分かった
- ~ これが採用テストだ ~
- ・面接の時だけじゃなくて、書類からきちんとしくちゃいけないんだと思った
- ・個人面接の時と違って、集団面接では他の人と比べられるから、むずかしいと思った
- ~ 見方を変えれば、世界が広がる！！~
- ・見方を変えることで自分の短所を長所に変えられることが分かった
- ・ポジティブだと自分自身もだんだん考え方がよくなっていくと思うし、相手も優しく言われると、うれしいと思う
- ~ ストレスと上手につきあおう ~
- ・腹式呼吸をすると落ち着くことが分かった。テストの時にやろうと思いました
- ・今まで、ストレスっていうのをためこんで、一人で悩んでたんやけど、解消できるって事がわかって、ちょっと良かった。これから、がんばる。

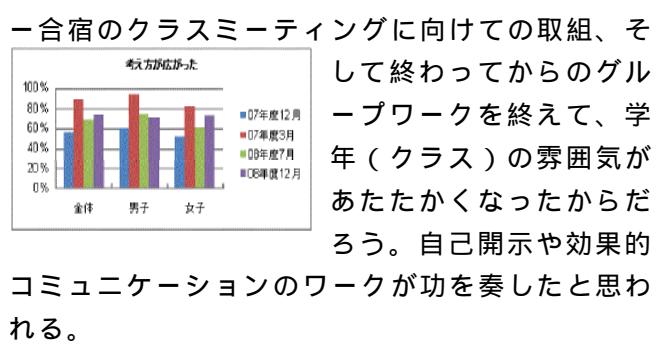
### b)自己評価より



左のグラフは、毎学期末に実施している『人間関係学科自己評価』の変化である。すべてにおいて、2007年度（2年生）の3月の値が高く、これを契機に下降はしているが全体として上昇していることが見て取れる。

23期生は、全体としては落ち着いているものの、仲間関係にストレス

を抱えた子どもの多い学年である。それが、スキー合宿のクラスミーティングに向けての取組、そして終わってからのグループワークを終えて、学年（クラス）の雰囲気があたたかくなつたからだろう。自己開示や効果的コミュニケーションのワークが功を奏したと思われる。

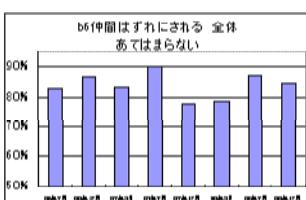
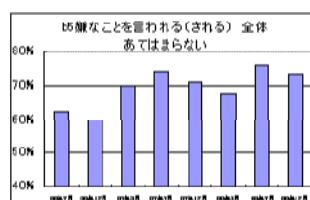


また、攻撃的な層と、我慢してストレスをためる層に分かれていた男子の解答で、「生活に生かした」が多くなっているのが成果だと言える。

3年生の9月からは、進路選択・進路決定にむけたストレスの対処や社会で通用するスキル、コミュニケーション能力についての学習を多く取り入れたため、難しいと感じる子どもももいたようだ。ただ、2学期末に「2学期になって、もともとHRSは必要だけど、もっと大事で必要なことなんだなと思った」「社会に役立つことをたくさん学べて、楽しかった」と感想を書いている子どもが多く、新しい発見、生活や学習への応用という点で高い数値をみせていることから考えても、進路に関するHRSはこの時期に必要なワークであり、また、進路に向かっていくクラスの雰囲気づくりにも非常に効果的であった。

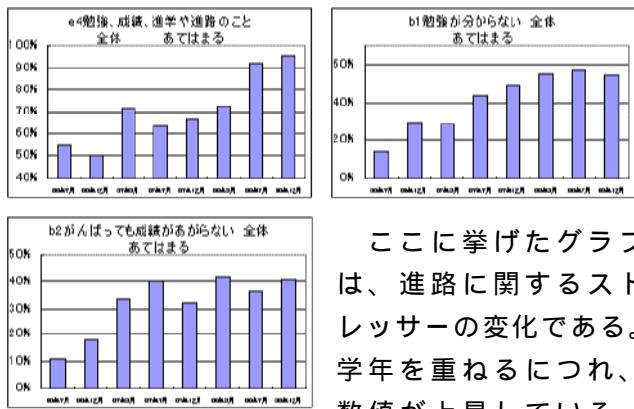
### c)学校生活調査より

#### 学年の被侵害率の低下



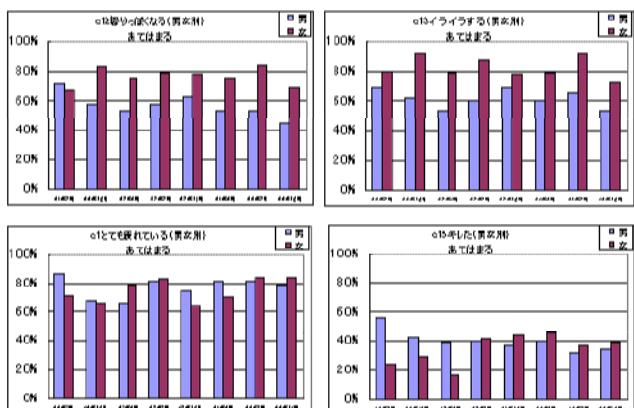
23期生は、2年生の2学期、仲間関係が悪くなつた時期があった。いくつもトラブルが発生し、懇談や指導を行つたことも多かった。しかし、スキー合宿前後の取組を経て、子どもたちの精神的な成長とともに、関係が良くなつていったと言えるのではないか。

## ストレスの増加とコーピングの男女差

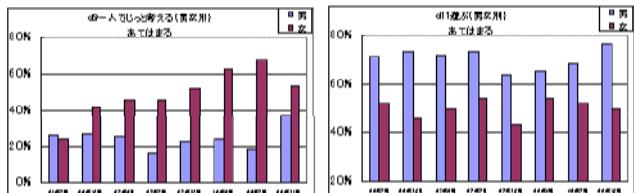


ここに挙げたグラフは、進路に関するストレスの増加とコーピングの男女差である。学年を重ねるにつれ、数値が上昇している。

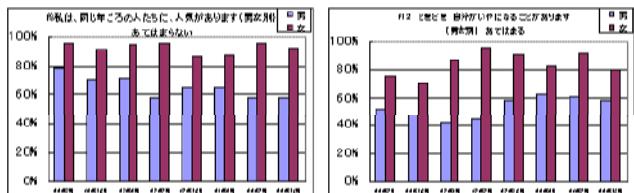
また、いろいろ・疲れているなどの、ストレス反応も高い(とくに女子)。だが、男子のストレス反応の変化をみると、「d12 怒りっぽい」「d15 キレた」などの攻撃的な対処につながる反応が下降



しており、逆に、女子のそれが上昇傾向である。ストレスの対処の仕方も、「d9 一人でじっと考える」女子と、「d11 遊ぶ」男子という構図が見て取れる。

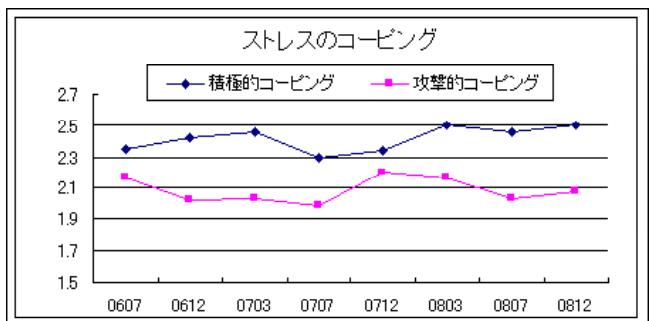


ほかに女子のストレスのコーピングとしては、「d12 寝る」(71%)「d13 食べる」(55%)「d8 がまんする」(52%)「d14 泣く」(47%)など、自分で解決しようと苦しんでいるように見える。



その原因として、上のグラフからも分かるように、女子の自他の関係性に自信がないことがあげられる。「d2 友だちに相談する」は58%と、やや低めである。とくに女子に対して、自分や他者への信頼につながる取組が課題であると言える。

## d) 今後の課題



学年全体の変化を、複数の関連項目から総合的に見ると、以下のようなになる。

積極的コーピング(d1~d4)は、学年が変わることに一度下降し、学年が進むごとに増えしていく。攻撃的コーピング(d5~d7)は、2年生2学期一度上昇するもののその後下降している。

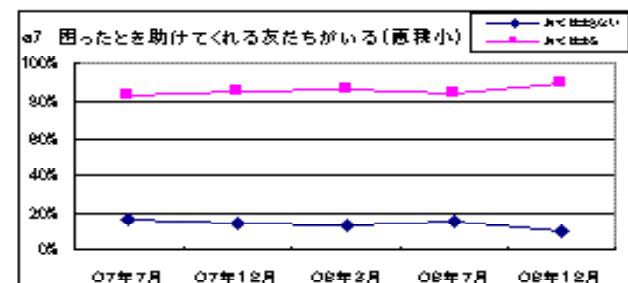
現在、過去と比較して最も攻撃的コーピングが低く積極的コーピングの値が高い。男子の数値が好転していることが大きいと思われるが、今後、特に女子のストレス反応とコーピングの実態を把握し、支援につなげていくことが課題となる。

また、子どもを個別に見たとき、「学校が楽しくない」と答えた子どもが、攻撃的コーピングに出る、悩みを多く抱える、自己肯定感が低いなどの強い関連をもっている(2005年度報告書より)。それぞれの実態に合った個別の支援も必要である。

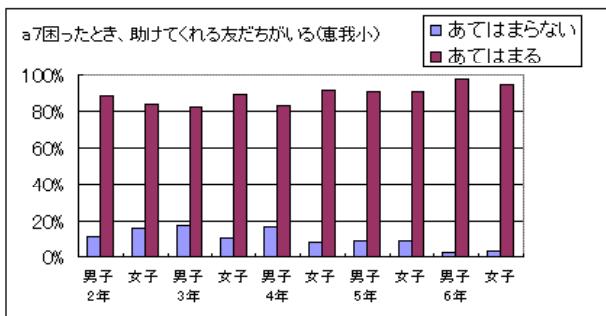
## 3) 恵我小学校

### 学校生活調査から

#### a) 子どもどうしの関係



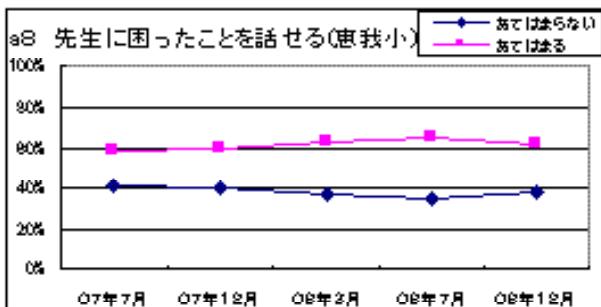
上のグラフは「a7 困ったときに助けてくれる友だちがいる」と答えた子どもの率の推移を表したグラフである。このグラフを見ると、概ね80%から90%の子どもがそう感じていることがわかる。その割合の移り変わりを見ても、僅かずつではあるが男女ともに増えてきていることがわかる。また今年度12月に実施したこの項目での学年別の集計を見ると、なかでも高学年になっていくにしたがって、その率は高くなっている。



のことから、「あいあいタイム」をはじめとした取組が浸透し、子どもたちは友だちとの関係がより深化したものになっているという自信を持っている様子がうかがえる。

### b) 教師と子どもの関係

次のグラフは「a8 先生に困ったことを話せる」



と答えた子どもの率の推移である。

こちらもアンケートの実施ごとにあてはまると答えた子どもの率は増えており、教師と子どもとの良好な関係が築けていることがうかがえる。「あいあいタイム」の授業を通して、教師自身が子どもとの接し方の中で、暖かいまなざしで受け入れていくこと、小さな反応にも見逃さないように注意を払うこと、そして、子どもの姿に共感をするという姿勢が浸透していく中での成果がでてきていていると考えられる。

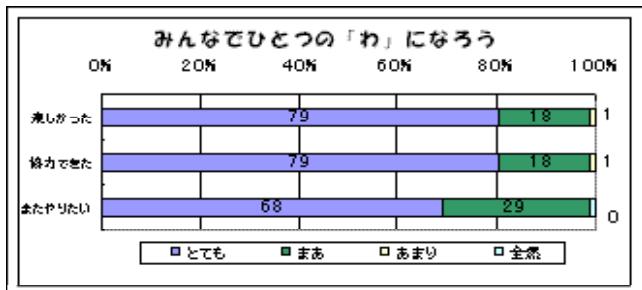
### 「あいあいタイム」の授業を通して

「あいあいタイム」の授業では、1時間の授業の最後に必ず「ふりかえりシート」を書かせている。どの学年も「授業が楽しかった」という質問に対しては、90%近くの子どもたちが「楽しかった」と答えている。またグループでの協力型のワークを行った6年の「みんなでひとつのかなになろう」では、協力できたかという質問に80%の子どもが協力できていると感じている。

不登校支援で名前があがっているBも、前述にあるように学校生活アンケートでは学校満足度で全体的に低いものの、「a5 楽しく話ができる友だちがいる」の項目ではそれまで「あてはまらない」側であったのが今年度はあてはまる側に好転して

いる。「あいあいタイム」のふりかえりシートでも「さんかく」さんが『きょうはいい天気だね』と言ったから『うんうん』て、ぼくは言った。『いい天気だね』て話しかけてくれてうれしかったです。」と具体的な友だちの名前をあげて、その子との関わりを喜ぶ感想を書くようになった。

低学年の子どもたちにとって「あいあいタイム」はいろいろな子と関わるきっかけになっており、また、友だちについて知る機会にもなっている。中学年の子どもたちについては友だちとのつながりを考えることのきっかけになっている。高学年



では具体的な場面での協力を感じる機会になっている。振り返りの感想の中でもそのことにつながる感想がでている。今後ふりかえりシートの項目を検討し、その学びをシェアできるような内容にしていきたい。

### a) 1年生

#### [1] 「あいあいタイム」の取組

コミュニケーションは、話す側と聴く側の両者がいて初めて成り立つ。1学期は、「話す」力を身につけるワークに取り組んだ。2学期は、それに引き続き、「聴く」力を身につけるワークに取り組んだ。

「上手な聴き方」を身につけ、「きちんと聴く」ことの大切さ、「聴いてもらえる」ことの心地よさを感じることができるようにパッケージを構成した。

第1時：目と耳むけて聴けるかな

- ・姿勢を正して聞いたら、とても聞きやすかったです。
- ・ちゃんと人の話を聞かないと、友だちと同じことはできないなと思った。だから、ちゃんとひとの話を聞こうと思った。

第2時：あいこしばは「そうだね」

- ・知らんぷりは「だめだな。」と思いました。これからは、しらんぷりをせずに生きていきたいです。
- ・ちゃんとうなずいてくれてうれしかった。自分が聞くときもちゃんとときかな相手の人が嫌な気持ちになるなと思った。

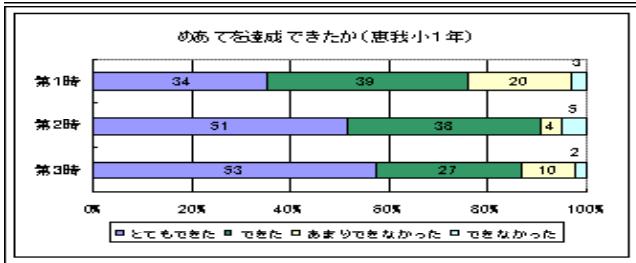
第3時：かくれているのはなあに？

- ・最初は緊張したけど、ちゃんとクイズをだすことができてよかったです。

・クイズをだしているときに、みんながちゃんと聞いてくれてうれしかった。

## [2]子どもたちの変化

「目と耳むけてきけるかな」「あいこしばは『そうだね』」がロールプレイを通してスキルを身につけるワークに対



して、「かくれているのはなに？」は、ゲーム形式のワークであった。振り返りシートの結果より、子どもたちにとって、ゲーム形式のワークの方が楽しいと感じるようだ。ロールプレイ形式のワークは、子どもたちにとって目的が明確でないことが考えられる。

めあてを達成できたかのグラフからは、第1時に比べると、ワークを重ねるごとにめあてを達成できたと感じる割合が高くなつたことがうかがえる。ソーシャルスキルを身につけるワークは、継続して行うと効果があるようだ。

## b ) 2年生

### [1] 「あいあいタイム」の取組

#### 第1パッケージ『自分大好き友だち大好き』

- 1] 友だち発見bingo
- 2] こんなときどう聞く
- 3] カードで質問

bingoやカードトークで楽しんだ。このとき友だちの話をしっかり聞くということが大切になることから、聴き方のスキルトレーニングをパッケージに組み込んでいる。自分とみんなでは意見や答えがちがうことに気づいたり、ドキドキしながら自分のことを話すことができたりしたと感じている。お友だちのこたえがとてもおもしろかった。私のこたえがでたらうれしかった。」と自分や友だちのことを出し合えたことを喜ぶ感想があった。

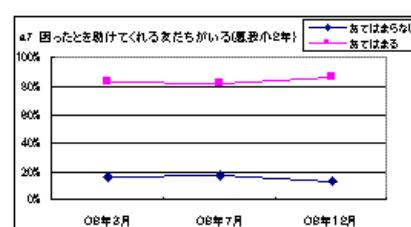
#### 第2パッケージ『ひとりじゃないからがんばれる』

- 1] こんなときどう言う
- 2] みんなでくぐろう
- 3] 色鉛筆がたりないよ

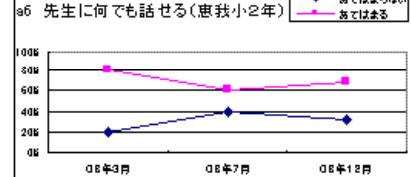
みんなで協力し合あうというグループワークによる気づきの学びをおこなつた。そのときにも、失敗をしても責め立てないことが学年の実態からも必要だったので、言葉のかけ方のスキルトレーニングを同じように組み込んでいる。子どもたちの反応としては、また、輪をみんなでくぐつたり、1枚の絵をみんなで仕上げたりするワークの中で、みんなでできたという気持ちを高めていた。「 さんがこけたとき、大丈夫とやさしくいってあげていたのでわたしも

そうなりたいとおもつた。」など好ましい態度をめざす感想があった。

## [2]子どもたちの変化



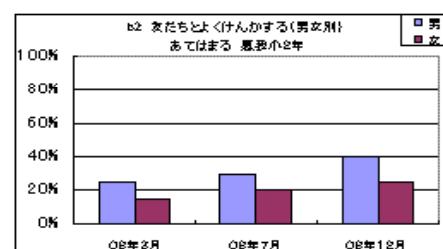
学校生活アンケートによると、「a5 楽しく話せる友だちがいる」や「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」など子どもどうしの関係性については男女とも高い割合であてはまる回答をしている。



「a3 先生にほめられたことがある」や「a6 先生に何でも話せる」など教員との関係性についても 7月アンケートと比べるとポイントが上昇してきている。

その反面、「b2 友だちとよくけんかする」はそう感じている子が増えており、友だち関係づくりについては自信を持てていなかつたり、実際の行動面でうまくいかずトラブルにつながつたりしている実態がうかがえる。

あいあいタイムとも関連づけながら、友だちとの好ましい関わり方のス



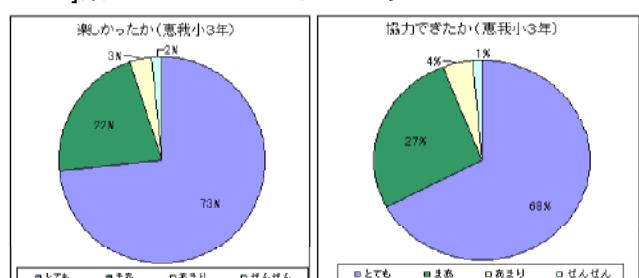
キルトレーニングを積みあげていくことが必要と思われる。

## c ) 3年生

### [1] 「あいあいタイム」の取組

#### パッケージ『楽しいクリスマス会をしよう』

- 1] ジゃんけんクリスマスツリー
- 2] 人間クリスマスツリー
- 3] かざりチェーンを作ろう
- 4] 楽しいクリスマス会をしよう



明確な目標をもって、班で協力し合うワークをした。子どもたちの満足度はとても高く、ワークを通して友だちのよさをたくさん見つけることができた。組になってじゃんけんをしたり、体を寄せ合つたり、少ない道具を使って飾りを作るといったワークをした後、クリスマス

会でしたが、とても盛り上がり、仲間のつながりを深める良い機会となった。

目標が単純で分かりやすく、協力しなければ進まないというワークが子どもたちに効果的だった。

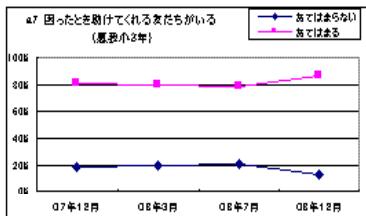
しかし、「楽しくなかった。」という子が数名いることから、やはり全員楽しめるように工夫していかなければならない。

～ワークの振り返りから～

- ・さいしょ、わたしは一人で作っていたとき、Aさんが「いっしょにやろ。」と言ってくれました。わたしはそれを言わされたからうれしかったので、楽しかったです。
- ・さいしょやることのない人はおって、おってあるやつは切る、切ったやつははる、とがんばっていました。次々にやってきました。いそがしかったけど、楽しかったです。細かいので手が追いつきませんでした。みんな協力して、3こチェーンを作りました。

## [2]子どもたちの変化

学校生活アンケートから、「a5 楽しく話せる友達がいる」「a7 困ったときに助けてくれる友達がいる」「a9 休み時間は、友だちと楽しく過ごしている」が男女とも増加している。また関連して、悩み度の「b3 無視される」「b4 嫌なことを言われる」「b5 仲間はずれにされる」が減少



している。これは、対人関係のワークを中心においタイムを積み重ねた成果ではないかと考える。

## d ) 4年生

### [1]「おいタイム」の取組

#### 第1パッケージ 『あせいっぱいの自分』

- 1] タイムトラベル
- 2] トラストアップ
- 3] スパイダーリフト

このパッケージは、運動会の練習と結びつけて取り組んだ。周りの子をよく見て声かけし、お互いに気遣い協力しあうことをねらいとした。

- ・協力ってむずかしいと思ったけど、相手の様子を見ていたら一緒に立てました。
- （トラストアップ感想）
- ・初めは、ストレスがたまるだけと思っていたけどやっていると楽しくなってきた。息を合わせることが必要だと思った。

（スパイダーリフト感想）

#### 第2パッケージ 『すてき発見！』

- 1] 変身ライダー
- 2] マインドマップ
- 3] すてきなサツマイモ

## 4] すてき星人になろう

自分に自信が持てないでいる子や、否定的な捉え方をする子たちが、自分の内面に目を向け自分のよさや自分らしさを見つけるようにこのパッケージを設定した。特に物事の見方を変え、肯定的に受け止める「リフレーミング」という内容を取り入れることで、お互いのよさを認め合える仲間関係をつくる手立てになればと考えた。

・周りの人から「めっちゃうまいやん」て言う声がいっぱい来てはづかしながらもうれしかった。顔が熱くなりました。 （変身ライダー感想）

・「自分のことがすき」と言っていてそう思えてすごいなあとと思いました。わたしも自分が好きになれるようになりたいです。

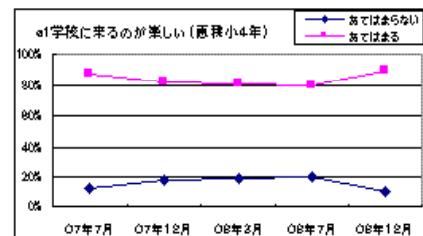
（マインドマップ感想）

・たった見方が違うだけと思っていたけど見方がちがうだけで気持ちや見え方も違うということがわかってうれしかったです。

（すてき星人になろう感想）

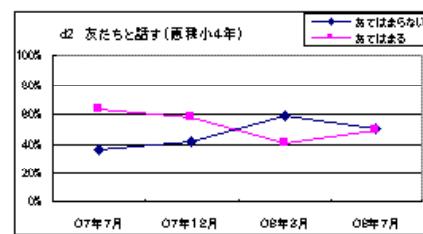
子どもたちは、「おいタイム」が大好きである。今回のような自己開示や自己信頼のワークは、とても新鮮だったようである。自分理解と共に友だち理解にもつながった。そして、気づいたことを自分の生活とつなげていけるように、今後の取り組みを進めていきたい。

## [2]子どもたちの変化



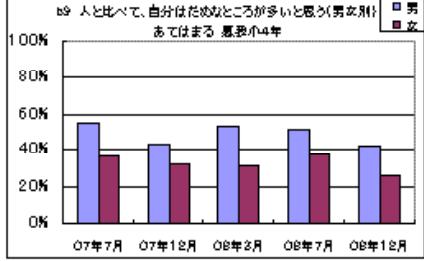
「a1 学校に来るのが楽しい」子どもが増えてきていることがわかる。また、「a5 楽しく話せる友達がいる」や「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」などでもあてはまるが増加していく、友だち関係の安定がa1 の結果につながっていると言えよう。さらに、「b4 いやなことを言われる（される）」のあてはまるが減少していることからも友だち関係で悩みを抱えることも少なくなっていることがわかる。そして、ストレスに対するコ

ーピングでも男女共に「d2 友だちと話す」の項目が増加し、「d5 物にあたる」「d6 人の嫌がることを言う」「d8 我慢する」の項目は減少傾向にある。上手にストレスに対処するようになってきていることがうかがえる。



しかし、この学年の子どもの特徴として以前から女子と男子の悩み度の高さの違いが挙げられていた。「b9 人と比べて自分はだめなところが多いと思う」で、男子のあては

まるが40%と女子に比べて依然として高く、課題となっている。



今後もアンケートから見えてきたことをもとに、子どもに効果的なよりよいワークを考えていきたい。

## e ) 5年生

### 1] 「あいあいタイム」の取組

5年生は、年間を通して「仲間との絆を大切にしよう」というテーマのもとに活動に取り組んできた。

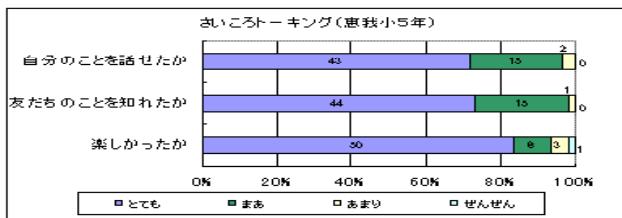
#### 第1パッケージ『見つめよう自分』

1]さいころトーキング

2]こんな友達だったらいいな

3]自分へのメッセージ

本パッケージは、自分をより深く見つめることと、一学期よりも友達のことをよく理解することをねらいとした。



・今までみんなのことがあまり知れていなかったけど今回で少しわかりました。楽しかったです。』

#### 第2パッケージ『つながろう友達と』

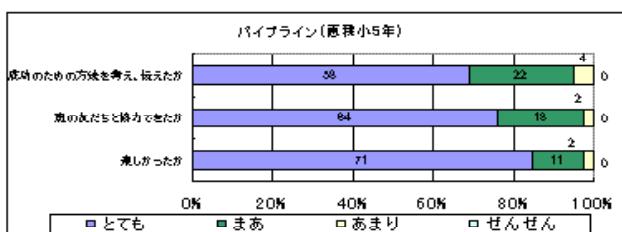
1]なぞの宝島

2]バケツボール

3]パイプライン

4]なぞの宝島

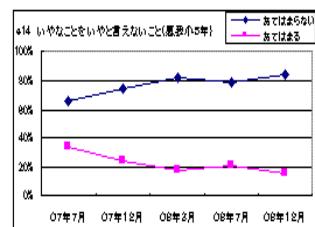
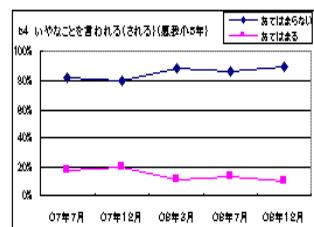
本パッケージは、班や学級で協力し、さまざまな課題を克服しながら、宝物を探していくという設定のもとすすめた。このパッケージを通して大事にしたことは、まわりの人の気持ちを考えながら、課題をうまく乗り越えるために、自分自身の役割をきちんと果たすということをねらいとした。



・自分だけが頑張っただけでは協力とは言わないし、班の一人でもやる気がなかったらいけない。みんなが力を合わせて協力というと思う。

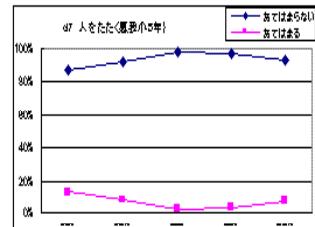
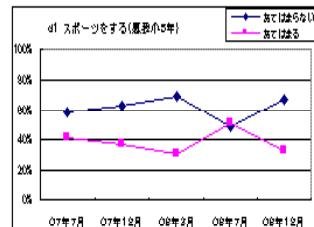
子どもたちは、協力して行う問題解決型のワークに積極的に取り組む一方で、友だちの話を聞くことができるワークに楽しさを感じている。

## [2]子どもたちの変化



友だちのことを理解し協力することの大切さを実感した子どもたちは、相手の気持ちを考え、本音が言えるより深い人間関係を築いてきている。

高学年においては、ストレスが増加する傾向がある。課題として、ストレスをスポーツや遊びで解消していないこと、特に男子は「d7 人をたたく」ことが増加傾向にあるようなので、上手なストレス対処法を見に付けられるワークを考えていきたい。



## f ) 6年生

### 1] 「あいあいタイム」の取組

#### 第1パッケージ『気持ちを伝え合おう』

1]組み立て体操

2]そうやっけ どうやっけ？

3]そう そう それそれ！！

共同作業に取り組む中で、友だちに声をかける状況を作り、友だちと協力して取り組むことの楽しさや充実感を感じてもらうことをねらいとした。

『組み立て体操』の感想

・今日楽しかったです。ピラミッドでいろいろな人の気持ちが分かりました。(運動会の)組み立て体操の練習もがんばりたいと思いました。

『組み立て体操』では、運動会の練習と結びつけて取り組んだため、その後の練習ではお互いに「大丈夫？」、「ここに手を置いてもいいけるかな？」などのやさしい声かけがあちこちで見られた。

『そう そう それそれ！！』では、友だちの輪に入っていくのが苦手である子が、自分が見てきたものを班の友だちに伝える係になったのをきっかけに、自分から友だちに話しかけて輪の中に入つていけた様子が見られた。

#### 第2パッケージ『心のキャッチボール』

## 1]言葉のキャッチボール

### 2]こんな友だちだったらいいな

### 3]心の中をそっとのぞいてみよう

自分や友だち、集団を客観的に見つめ直す機会をつくることをねらいとした。

『心の中をそっとのぞいてみよう』の感想

・私は今日のやりとりを見て、やってしまったこともあるし、やられてしまったこともあるなあと思いました。これからは、ちゃんと意識して会話しようと思います。

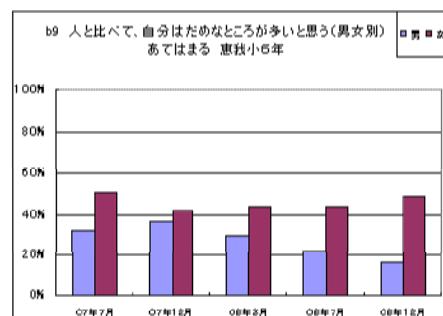
『言葉のキャッチボール』では、教員のロールプレイを見ることで、客観的に事象をとらえることができ、自分の生活と重ね合わせて考えることができた。

## [2]子どもたちの変化

次のグラフは、6年生の学校満足度を問うアンケートの推移である。あいあいタイムに本格的に取り組むようになった2007年7月以来、上昇傾向にあり、子どもたちの学校生活は良好な友達関係を育みながら概ね安定してきたようだ。

一方で成長とともに、悩みやストレスは増加している。下のグラフは「b9 人と比べて、自分はだめなところが多いと思う」と答えた子どもを男女別に表したものである。

男子が減少傾向にあるのに対し、女子は約半数が自分に自信を持てず、悩みを抱えている傾向が続いている

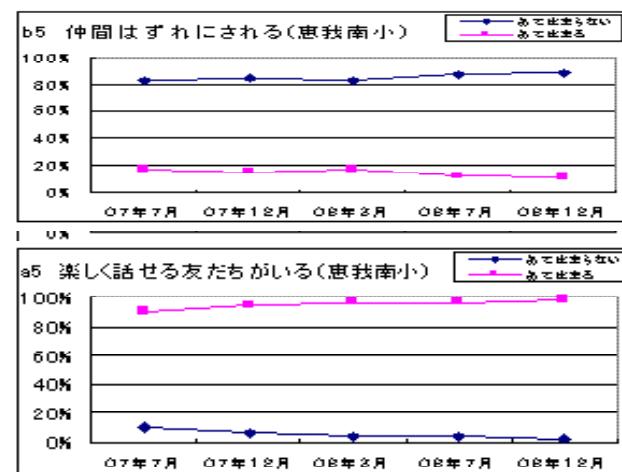


友だち関係で悩みを抱えていたりする傾向があるためではないだろうか。一方、自己肯定感が高い子どもを個別にみると、友だち関係が安定しており、ストレッサーも低いことがわかった。3学期は進路の問題が身近にせまり、友だち関係もより深くなり心が揺れる時期である。そういう心の揺れを教員が把握し、丁寧に話を聴き、支援していきたいと思う。

## 4) 恵我南小学校

### 学校生活調査より

#### a) 子どもどうしの関係

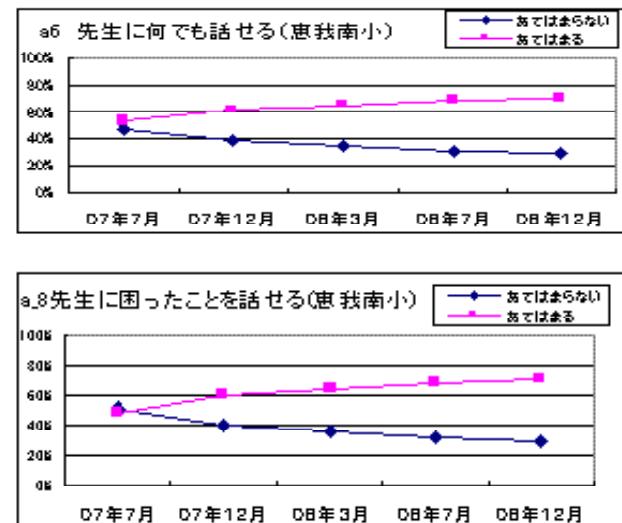


「b5 なかまはずれにされる」という項目では、2007年7月から少しづつ減少傾向にある。

また、「a5 楽しく話せる友だちがいる」、「a9 休み時間は友だちと楽しくすごしている。」という項目で「あてはまる」と答えた子どもは、それぞれ98%、95%に達していて、大きく改善している。

3つのグラフから子どもどうしの仲間関係は良い方向に向っていることがうかがえる。しかし、少数ではあるが、仲間関係がうまくいっていないと答えた子どももあり、個々の問題にも目を向け、引き続き人間関係を深める取り組みを進めていきたい。

#### b) 教師と子どもの関係

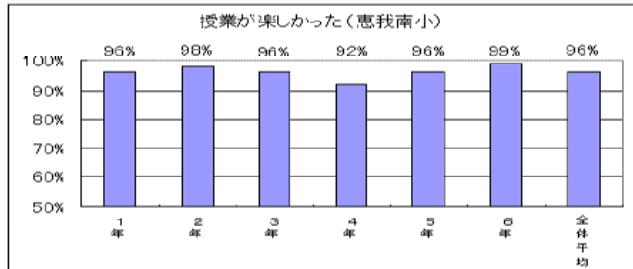


「a6 先生に何でも話せる」「a8 先生に困ったことを話せる」と答えた子どもは、増加の傾向にあり、12月の結果では、70%を超えており。しかし、「b6 先生と話ができない」という項目では、1

0%近くの子どもが「あてはまる」と答えている。

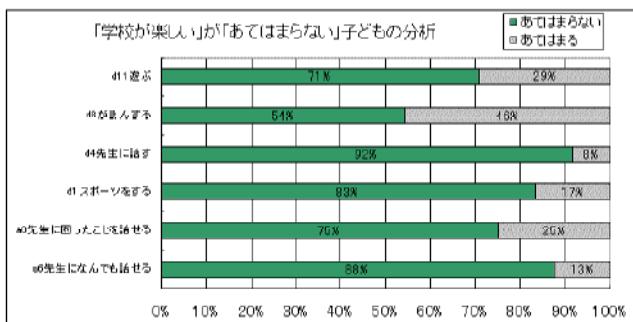
あいあいタイムを通して、全体的に教員と子どもとの関係が近づいてきている。しかし、残された一部の子どもへの関わり方を再検討する必要がある。

### 「あいあいタイム」の授業を通して



上のグラフは、各学年の研究授業のパッケージで使った「ふりかえりシート」の「今日の授業は楽しかったですか」という質問に対して、「楽しかった」と答えた子どもの率である。ほぼ全ての学年で、昨年より増加しており、全体平均も95%を越えている。このように子どもたちは、「あいあいタイム」を毎回大変楽しみにしており、以前にも増して意欲的に取り組んでいることがわかる。

### 「学校が楽しい」が「あてはまらない」子どもの分析



上のグラフは、「a1 学校が楽しい」にあてはまらないグループを分析したものである。

学校が楽しくなかったり、先生と話をしたくなったり、困ったことを話せないことが多く、一人でがまんする傾向がある。また遊んだり、スポーツする子も少ない。このような子どもたちには、教師の側から積極的に話しかけたり、実態に応じた遊びやスポーツを組織して関わりを深める必要がある。

#### a) 1年生

##### [1] 今年度の取組

学校生活を楽しみ入学してきた1年生が、遊びを中心に仲間づくりをできるように、「あいあ

いタイム～いっしょにあそぼう～」を計画した。また、1年生は、男子と女子の比が2:1の学年であるので、少ない女子が男子に混じり元気に遊べるようにとも、考えた。

1学期は、「いっしょにあそぼうPart」として、友だちの輪を広げ、人と接するときの基



本スキルも身に付けるために、国語科と関連して取り組んだ。まずは、国語科「どうぞよろしく」とあわせて自己紹介の「あいあいタイム」をもった。長い夏休みの後の2学期の初めに、いいところみつけをして、友だちのよさをみんなで共有した。その後、「いっしょにあそぼう」とさそいあう「あいあいタイム」をもった。「あいあいタイム」では「いっしょにあそぼうPart～どうしたの～」として遊びに入れない友だちを誘ったり、遊びが合わないときに話し合って一緒に楽しく遊べるようにスキル学習に取り組んだ。

3学期は、「いっしょにあそぼうPart」として、遊びに遅れてきた友だちを遊びにいれるようなスキル学習に取り組みたい。

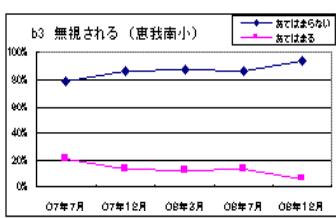
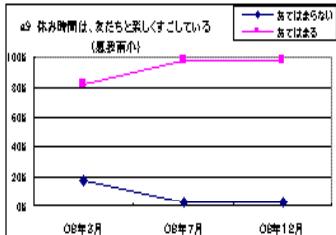
##### [2] 成果と課題

1学期は「あいあいタイム」の後、「いっしょにあそぼう月間」をもった。このことで、少人数より、より多くの人数で遊ぶ方が楽しいことを子どもたちは実感した。そこで、学年全体で朝遊びをすることにした。朝遊びには少ない女子も積極的に参加している。また、1学期は6年生とも「あいあいタイム」を持ち、そこから6年1年の木曜遊びが始まった。6年生と遊ぶことで、遊びの輪も種類も広がっていった。2学期の「あいあいタイム」の後、班遊びをスタートさせ、「どうしたの」と聞くことで、気持ちをより通じ合わせて遊べるようになった。

学校では、朝遊びや班遊びで楽しく遊べるようになったが、放課後、公園で遊んでいるときは、「入れて」と来た子を入れてあげなかつたりする様子がまだ残っている。3学期はそれを解消できるような「あいあいタイム」をもちたい。

## b ) 2年生

### [1] 今年度の取組



自分の頑張りをほめてもらえる心地よさを感じさせ、これからも頑張っていこうとする気持ちや自己肯定感を持たせた。そして、友だちの良い面を認めようという姿勢を育ててきた。アンケート結果からも、友だちとは、「a 9休み時間など楽しく過ごせている」ことがわかる。

2学期は、「一人じゃないからがんばれる」というテーマで、「輪くぐり」「一枚の絵を完成させよう」「バースデーチェーン」などのワークに取り組んだ。子どもたちは、みんなで協力して、やりきる楽しさや喜びを感じた。しかし、困ったときに助けてくれる友だちがいないとか、「b3無視される」と悩んでいる子が若干増えていることがグラフから読み取れる。

### [2] 成果と課題

「d5 物にあたる」などの対処法がある中で、「d6人の嫌がることを言う」が、ほとんどないという結果が出た。このことは、今までの「あいあいタイム」の学習が生かされていると考えられる。ストレス対処法のワークにこれから取り組む予定である。そして、友だちどうしのつながりをより深めるようなワークについても継続して取り組んでいきたい。



## c ) 3年生

### [1] 今年度の取組

今年度からの校区編成に伴い、新たな仲間が多数学年に加わった。年度当初、まだお互いに自信を持って名前を呼びえないため、まだ人間関係がつくりきれていない子どもがいるといった実態があった。

1学期のワークでは、そのような実態を踏まえ、早くクラスメイトと打ち解け、気軽に名前を呼び合ったり、声をかけ合ったり、協力し合えるようになることをねらいとして設定した。

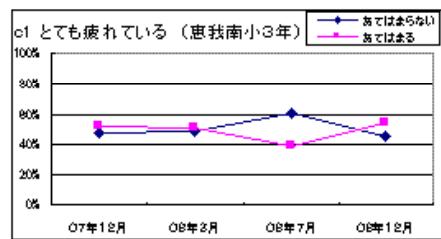


2学期のワークでは、友だちとのつながりをさらに深めることができるように、友だちと協力して行うワークに取り組んだ。友だちのことをもっと深く知り、見つめられるよう意識してワークに取り組み、自分のことや友だちのことで様々な気づきを発見することをねらいとして設定した。

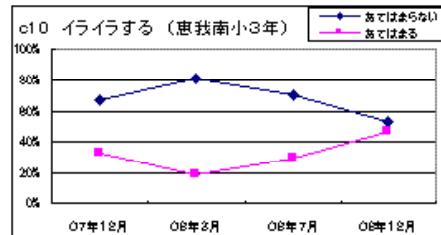
3学期は、生活アンケートから見えたストレスに関するワークを中心に取り組む。また、相手の気持ちをわかった働きかけ方やあたたかい言葉のかけ方などのソーシャルスキルトレーニングに取り組む。

### [2] 成果と課題

2学期末の生活アンケートでは、1学期末に比べ、学校で楽しく過ごすことが出来ていると感じる子どもたちが増えていく。



校区編成における新たな仲間が加わった集団は、あいあいタイムや様々な学校での活動を通して、人間関係がつながってきていることがうかがえる。また、ストレスに関する項目の「c1 とても疲れている」「c10 イライラする」の数値が増加傾向にある。



後の課題としてとらえ、ストレスとは何なのか、またストレスと向き合うための対処法等のあいあいタイムのワークに、今後取り組んでいきたい。

## d ) 4年生

### [1] 今年度の取組



昨年度の1クラスから、本年度は2クラスになった。2クラスになり、自分のクラスでの役割や責任、新しい友だち関係と、とまどうことも増えたように思う。

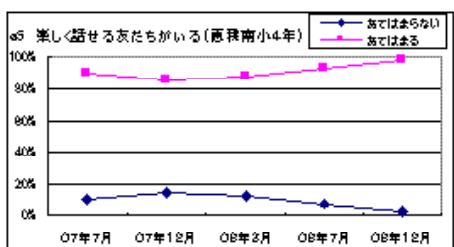
1学期には、新しい友だち関係でもう一度自分

や友だちの良さを知り、クラスで共有し、男女関係なくみんなで力を合わせ、達成感を味わうことを中心にワークに取り組んだ。あらためて自分の良さ・友だちの良さに気づきながら、互いに認め合えるようにねらいを決めた。

2学期には、物事に対していろいろな見方があることや自分の気持ちに気づき、前向きに考えたり言葉に表せることを目標としたワークを行った。また、12月からは新しくストレス対処についてのワークを行い、気持ちを落ち着けることの大切さやストレスに対するちがった見方ができるように取り組んだ。

3学期は、2学期からのストレス対処に引き続き取り組むことで、感情を知って、よりよい人間関係を築くワークに取り組みたい。そして、友だちに流されず、自分の気持ちを伝えられるような取組も行いたい。

## [2]成果と課題



1学期から友だちの良さを共有することを取り組んだことで、「a5 楽しく話

せる友だちがいる」からも分かるように、クラスの人間関係は良好である。また、遊びを通しての友だちづくりができてきただけで、引き続いて取り組みたい。ただ、全体的に何かストレスがあると、人に嫌がることを言うことで発散する傾向にあり、何でも言える・相談し合える人間関係づくりができているとは言えない。また、多くの子どもたちが先生との関係で満足しているとは言えないことが分かった。3学期は自分でストレスをどううまく対処していくか、そして教師と子どもたちとの関わりのあり方が課題となる。

## e) 5年生

### [1] 今年度の取組

昨年度までは学年2クラスの体制であったが、本年度より学年1クラスになった。学級内的人数が倍になり、何をするにも今までとは違った環境でのスタートであった。

そのような中、まず1学期の初めには、同じ話題について小グループで話す、友だちのいいところを見つける、簡単な作業で力を合わせるといったワークに取り組んだ。また、6月頃からは力を合わせたり相手と丁寧に関わったりすることが心地よい・大切であると実感できるようなワーク『いろいろコミュニケーション』に取り組んだ。これは、夏休みに控えた林間学舎へ向けての取り

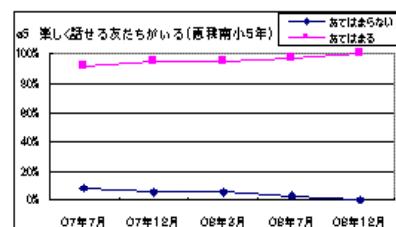
組みにもつながった。



2学期には、自分のよさを友だちに認めてもらえるとともに、自分の課題にも気づけるようなワークに取り組んだ。その後、力を合わせて一つの課題に取り組むワークを行った。また、11月から、ストレスとは何か、どのようにすると発散(対処)させられるのか、腹式呼吸やリラクゼーションの方法を体験するワーク『こころとからだリラックス』に取り組んだ。

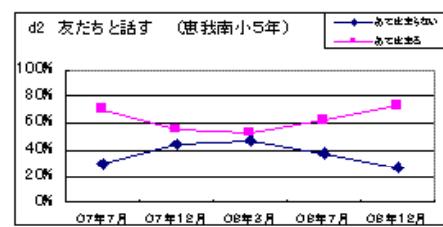
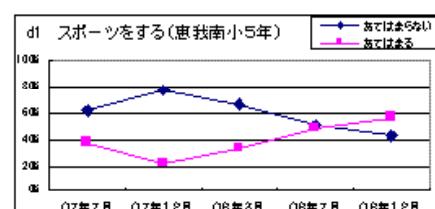
3学期は、2学期からのストレスマネジメント学習の継続に取り組み、さらにストレスを感じることが少ない良好な人間関係を築くためのソーシャルスキルトレーニングにも取り組みたい。

## [2]成果と課題



学校生活調査では、「a5 楽しく話せる友だちがいる」の項目で全ての子どもが「あてはまる」と答えている。

年度当初はクラス内的人数の多さにとまどっていたが、人数が多くなったことが人間関係の広まりにつながり、また様々な生活・学習活動を経験したことで楽しく話せる友だちをつくりやすい環境になったようである。



一方で、ストレスを感じる場面は増加傾向にある。その対処方法として「d1 スポーツをする」「d2 友だちに話す」といった対処の増加も見られるが、まだ

まだ抱えたままという現状も見られ、今後の課題である。

## f) 6年生

### [1] 今年度の取組

これまでの取組や「あいあいタイム」を経験する中で、集団としての高まりを見ることができる。

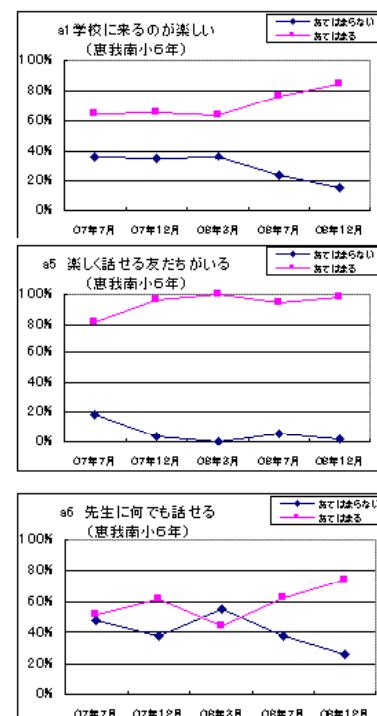
1学期は、「キラリ 輝け」と題したワークに

取り組み、自分自身を見つめ、自分を客観的に評価した。さらに、友だちが自分をどう見ているのか、評価してもらう取組をすすめた。その結果、自分が描いている自分のイメージよりも、他者からの評価が高く、自己有用感が生まれ、少しづつ自信を持てるようになってきた。

1年生との取組、「いっしょに遊ぼう！」においては、ピアサポートの観点から、ともに遊んだり、取組をすすめる中で、1年生をしっかりとささてあげなければならないという想いが芽生え、自己効力感を高めることができた。

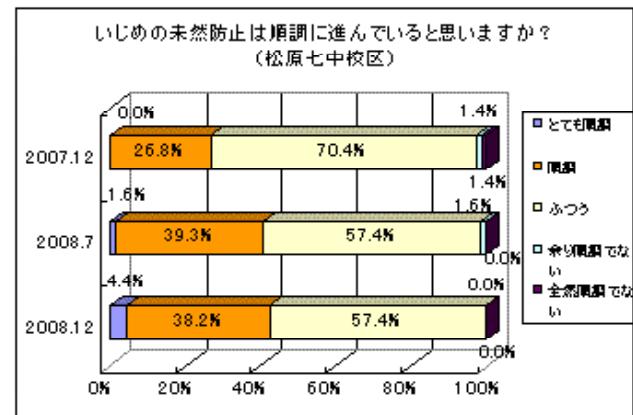
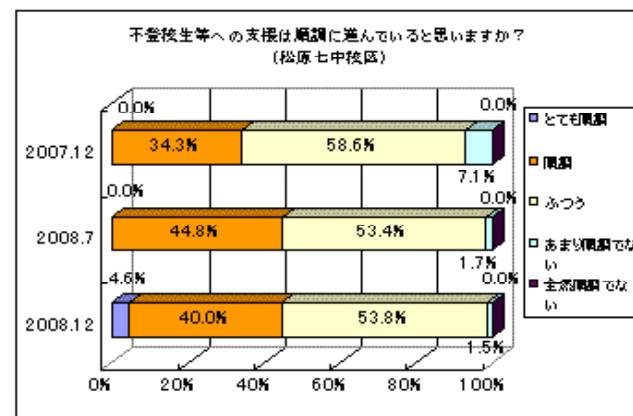
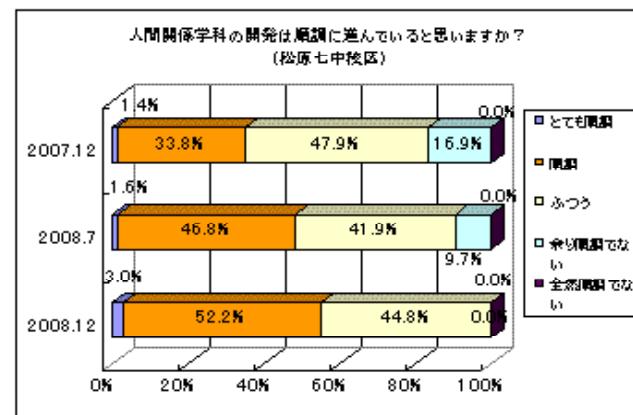
また2学期には、中学進学への不安を解消するため、中学生とともに授業を行うコラボレーション授業「そうそう！それそれ！！」に取り組んだ。実際に中学の先輩とともに活動したり、中学校の先生に教えてもらうことで、中学進学に対して抱いていた不安が安心へと変わり、進学を前向きにとらえられるようになったと考えられる。

## [2]成果と課題



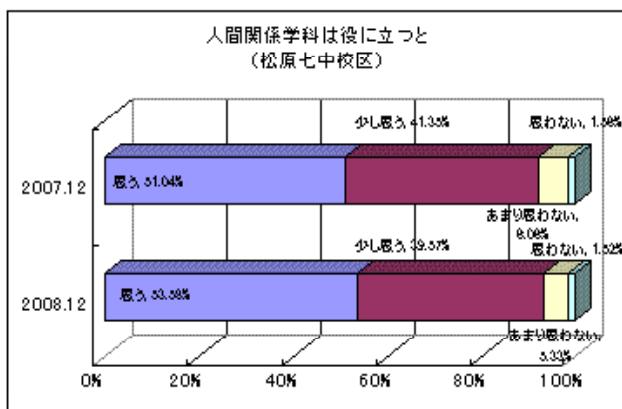
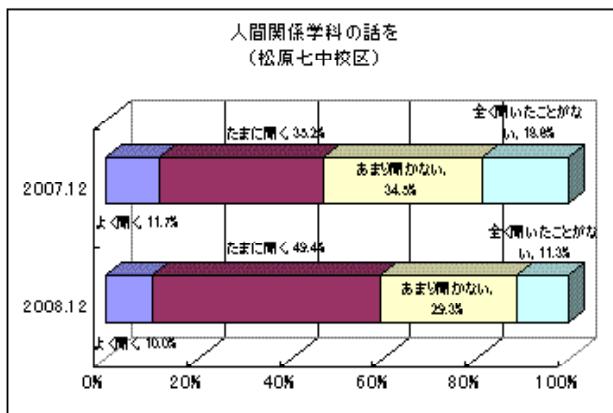
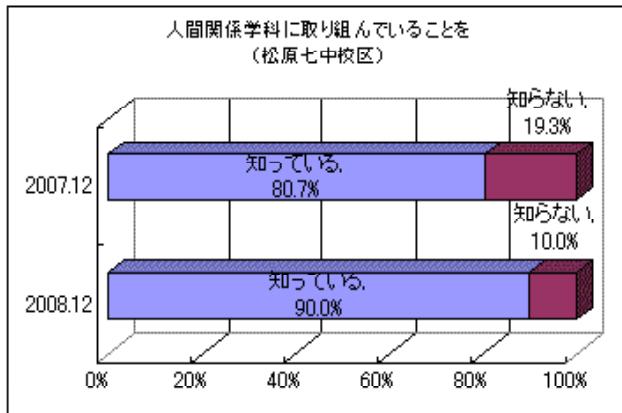
「あいあいタイム」や日常の教育活動を通じて、学校そのものを楽しめる傾向が見られる。特に、教師との関係においては、その関係性が確実に良くなっていることがわかる。また、子ども同士の関係においても、楽しく過ごせていることがアンケートからうかがえる。しかし一方で、学校が楽しくないと感じている子どももいることも配慮しつつ、3学期の取組につなげていきたい。

## 2. 教員のアンケートから



これまで、2007年12月、2008年7月、12月と恵我小・恵我南小・松原七中・(恵我幼稚園)の教員を対象に研究開発アンケートを実施した。その中から研究開発の中心課題に関わる3項目について見ていくと、3項目ともに本年度になって、「とても順調・順調」の項目の数値が増え、「あまり順調でない・全然順調でない」の項目がほぼ0%という状況になっている。まだまだ、3校間の温度差があるとは言え、研究開発はほぼ順調に進んできていると言える。特に2008年9月から11月にかけては、校区内で学校を越えた教員の交流を様々なレベルで数多く持ったこともあり、研究開発の校区としての進展を多くの教員が感じている。

### 3. 保護者のアンケートから



2007年12月、2008年12月と2回にわたり、松原七中校区保護者対象にアンケート調査を行った。「人間関係学科に取り組んでいることを知っていますか?」という質問に関しては、約10ポイント上昇し90%の保護者の認知を得た。「人間関係学科の話を家庭で子どもから聞いたことがありますか?」という質問では、約12ポイント上昇し約60%の保護者が「よく聞く、たまに聞く」と答えている。そして、「人間関係学科は生活に役立つと思いますか?」という質問に至っては、約2ポイントの上昇ではあるが、全体で93%の保護者が「思う・少し思う」と答えている。文章表記の部分では、学校に対して「素晴らしい時間だと思っています。」「いつも新しい工夫をされ、その時々に応じてタイムリーだと

思うような内容を開発されていることに驚き、感激しています。」「将来ずっと続いている人間関係、人と人とのつきあいが一番大切で難しいと思います。」「勉強以外の大切な取組を経験させて欲しいと思います。」などの肯定的評価の意見がほとんどを占めていた。しかし、ほんの一部ではあるが、「時間割をさいてまで教えなければいけないことでしょうか?」などという誤解に基づいた否定的意見もあったが、明らかに学校側からの説明不足が原因であり、アカウンタビリティーの徹底が問われていることがわかる。

## 研究開発実施上の問題点及び今後の研究開発の方向

### 1. 実施上の問題点

校区で一貫した取組をめざし、継続した内容創造のための、校内・学校間の諸会議の設定の難しさ。

教員間、学校間における意識の違いを、プラスに作用させることの難しさ。

校区での成果を客観的に評価し、成果を発信しつつ内部に返していくことの難しさ。

### 2. 今後の課題

七中校区として11年間のカリキュラムづくりを行う。本年度明らかになった人間関係学科の主になる領域を、いかに順序立てて配列し、中学校3年生の最終段階にもっていくかということを、校区の教員全員で考え、人間関係学科実施の指針を作成する。

校区としての不登校生等支援といじめの未然防止に関わって、校区で一貫した取組を定着させる。

効果測定に関して、本年度小学校で根づいてきたデータ収集と基礎データづくりを、各校の課題を明らかにしていくための、積極的効果測定へと移行させていく。

人間関係づくりを地域のものとしていくために、地域人材の活用や、地域への発信を行う。

子どものファシリテータとしての資質向上をはかるための研修を実施する。

研究開発の内容に普遍性を持たせていくために、諸研究会への積極的な参加や、  
松原七中校区研究開発HP

(<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/08koukuenpatsu/koukuhyoushi.htm>)  
等を活用し、外部と連携を図る。